

第二言語としての二種類の複合動詞の習得 —コーパスによる学習者の使用実態調査をもとに—

陳 曦

1. はじめに

本研究は、日本語学習者の使用実態調査による第二言語としての二種類の日本語複合動詞の習得研究である。ここでいう複合動詞とは、「話し合う、泣き叫ぶ」のように、前の動詞(「前項動詞」或いは「V1」)の連用形にもう一つの動詞(「後項動詞」或いは「V2」)が結合したものを指す。複合動詞はその結合条件、結合した複合動詞の相互作用などが複雑で、学習者にとってその理解と使用が難しく、有効な学習指導や習得支援が必要であると日本語教育者や研究者によって指摘され続けてきた(姫野 1975、森田 1990、田中 1996、永井 1996、松田 2004、陳 2007a、張 2009、于 2009、何 2010 など)。

近年、日本語教育の分野では、複合動詞習得の必要性と重要性に関する認識が高まり、研究成果が徐々に蓄積されてきた(松田 2000、2002、2004; 陳 2004、2006、2007a; 白 2005、2007; 何 2007、2009)。ところが、これらの研究のほとんどは、複合動詞の文法的側面に着目し、ある後項動詞項目(松田は「～こむ」、陳は「～あう」と「～こむ」、白は「～だす」)の文判断テストや文産出テストなど文法研究に向いている日本語学的方法を用いて、意味研究によって推測された困難点を検証する研究である。得られた結果は、学習者の言語知識を捉えているものであると考えられる。しかし言語知識と実際の発話や作文における運用とは別個のものとして考えられなければならない(Larsen-Freeman & Long 1991)ことから、複合動詞の習得研究には、運用に目を向けた調査が必要になるであろう。また、実験という人工的な言語環境に置かれた場合に、学習者は普段とは非常に異なる言葉を産出する可能性があることから、運用データの使用はとりわけ重要である。学習者の発話や作文などの具体的な産出データをさまざまな観点から綿密に分析することによって、学習者の使用実

態、習得過程の真相により近づくことができると思われる。しかし、現在、複合動詞全般を研究対象とし、学習者が産出した運用データを利用した学習者の使用状況解明と陥りやすい誤用に関する実証的習得研究は進展していない。

複合動詞は語彙と文法の境界領域にあるとも言えよう。複合動詞の習得研究は、文法項目の習得研究という側面と同時に、語彙の習得研究という側面を持ち、その習得の様相は複雑なものであると考えられる。『新版日本語教育事典』(2005:69)では、複合動詞を後の動詞により、語彙的複合と文法的(統語的)複合と大別されると記述している。これで分かるように、日本語教育において、基本的には、影山(1993、1996)、影山・由本(1997)による複合動詞には「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二種類あるという考え方を踏襲している。したがって、効果的な複合動詞教育・実践を行うために、この二種類の複合動詞の習得研究を行う必要があると考えられる。しかし、現在まで同時に複合動詞の語彙的側面と統語的側面を視野に入れた第二言語としての複合動詞の習得研究は存在しない。一方、寺田(2001)では、この二種類の複合動詞は異なるメカニズムによって習得されるという仮説をたて、母語としての複合動詞習得に関する調査を行った。第二言語としての複合動詞習得研究にとって、寺田(2001)は大いに参考しうるとされる。

以上のことを踏まえ、筆者は複合動詞全般を研究対象として、学習者の運用データを用い、複合動詞の語彙的側面と統語的側面に着目した複合動詞習得研究を進め、一連の成果を挙げてきた(陳2007b、陳2008a、陳2008b)。本稿では、これまでの研究をさらに発展させ、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の二種類の複合動詞の使用状況や誤用を分析することを目的とする。

2. 理論的枠組み

本稿では、複合動詞がその派生されるレベルによって、「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の二つに分類されるという枠組みで考察を進める(影山 1993、1996;影山・由本 1997)。以下、同じ「動詞連用形+動詞」という構造をとる複合動詞が二種類に分けられることを、構造的な相違、結合条件と分類基準の3点に分けて述べていく。

2.1 構造的な相違

影山(1993)は、生成文法の立場から複合動詞の「派生過程の違い」に着目し、以下のよ

うに複合動詞を、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二種類に分類している。

語彙的複合動詞: 具体的に意味から見ると語彙的な結合制限があり、補文関係をとらない複合動詞である。(例: 飛び上がる、沸き立つ、飲み歩く)

統語的複合動詞: 補文関係を取る複合動詞で、「話し始める」が「話すことを始める」と言い換えられるように前項が後項の目的語(もしくは主語)になるものである。(例: 話し終わる、食べ始める、歩き過ぎる)

影山(1993)によれば、語彙的複合動詞を構成するV1とV2の意味関係を見ると、動作の様態・手段(押し開ける、転げ落ちる)、付帯状況(飲み歩く、語り明かす)、アスペクト(泣き止む=泣くことが止む、降りしきる=さかんに降る)など、種々雑多な意味関係があり、しかも多くの場合様々に意味の不透明化や語彙化が進んでいる¹。一方、統語的複合動詞は、V1とV2の意味関係が完全に透明かつ合成的であり、「書類を書き終える=書類を書くことを終える」「パソコンを使い慣れる=パソコンを使うことに慣れる」のようにいずれも補文構造として分析でき、通常の文の意味解釈が合成的なことと平行している(寺田 2001)。

2.2 結合条件

影山(1993)は日本語の動詞を他動詞、非能格自動詞、非対格自動詞の3つに分類し、次のように複合動詞のV1とV2の結合には、「他動性調和の原則」が働いていると主張している。

- (75)a. 他動詞: (x <y>)
- b. 非能格自動詞: (x <>)
- c. 非対格自動詞: <y>

V-V 型の複合動詞においては、この項構造が決定的な意義を持っている。(中略) 他動詞(75a)と非能格自動詞(75b)の項構造は同じタイプと見なすことができるから、他動詞+他動詞、非能格自動詞+非能格自動詞だけではなく、他動詞と非能格自動詞が混在した複合動詞も可能である。他方、非対格自動詞の項構造(75c)はこれら二

¹ 例えば、「飲み歩く」といえば、慣習的にアルコール類に限定されており、水やジュースを飲み歩く、というのは通常ありえない表現である。一方、統語的複合動詞は、そのような意味の慣習化は見られず「飲み始める」や「飲み慣れる」は、飲む対象はアルコール類に限られずどのような液体でもよい。

者とは形式が異なるから、基本的に非対格自動詞は非対格自動詞としか結合しない。
これを他動詞調和の原則と呼んでおこう。(影山 1993:117)

松本(1998)は影山(1993)における非能格自動詞と非対格自動詞の認定方法の妥当性に疑問を持ち、再検証したうえで、複合動詞のV1とV2の結合可能性について、「他動性調和の原則」より制約の緩い「主語一致の原則」²によって説明できるとした。「主語一致の原則」とは、「二つの動詞の主語として実現する項が同一物を指すというもので、主語になるものであれば外項同士(あるいは内項同士)である必要はない」(松本1998:52)というものである。ここで「外項」「内項」というのはそれぞれ「主語」と「目的語」に相当するものであると考えよう。概念意味論では「主語」「目的語」という用語を使わず、他動詞の主語を「外項(external structure)」、目的語を「内項(internal structure)」と呼んでいる。つまり外項は動作をする側、内項は動作を受ける側である。これを自動詞に当てはめた場合、意志自動詞の主語は「外項」、無意志自動詞の主語は「内項」に相当すると考えられている。

2.3 分類基準

影山(1993)の語彙的対統語的という区別は、両者が統語的に異なる性質を持つことを以下に示すようなテストによって明確にできる(*はできない例)。

(1) 代用形「そうする」との置換の可否

語彙的複合動詞: 不可 私が飲み歩く→*彼もそうし歩く

統語的複合動詞: 可 私は飲み始める→彼もそうし始める

(2) サ変動詞の使用の可否

語彙的複合動詞: 不可 *売買し歩く

統語的複合動詞: 可 売買し始める

(3) 主語尊敬語の可能性

語彙的複合動詞: 不可 *お飲みになり歩く

² 中国語も「動詞+動詞」の複合を許すが「主語一致の原則」は存在しない。例えば、「張三打死了李四(張三が李四を殴った結果、李四が死んだ)」という文が中国語では可能だが、日本語ではいえない。そのため「主語一致の原則」は普遍的なものとはいえず、日本語教育では留意しておく必要がある(松田 2004:20)。

統語的複合動詞: 可 お飲みになり始める

(4) 受身形の可能性

語彙的複合動詞: 不可 * 書かれこむ

統語的複合動詞: 可 書かれ始める

(5) 重複構文の可能性

語彙的複合動詞: 不可 * 書きに書き込む

統語的複合動詞: 可 鍛えに鍛え抜く

(3)、(4)、(5)については、必ずしも全ての動詞について適用できるわけではない。しかし、(1)と(2)については、どの場合でも適用可能なので、この二つを分類基準とすれば、二種類の複合動詞を区別するのに有効である。ゆえに、本稿では、主に(1)と(2)を語彙的複合動詞と統語的複合動詞の分類基準とする。

3. 先行研究(寺田 2001)

寺田(2001)は、影山(1993、1996)、影山・由本(1997)の、複合動詞には「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」があるという主張を受けて、二者は異なるメカニズムによって習得されるという仮説をたて、帰国子女を対象に複合動詞の習得に関する調査を行った。「統語的複合動詞」は規則を適応していく default タイプであり、「語彙的複合動詞」は頻度と類推によって長期記憶に載せる(=Mental lexicon³にリストして覚える)タイプであろうとする習得仮説を立て、帰国子女を対象に、複合動詞の作成、理解、正誤判定テストを用いて調査を行った。その結果、予想どおり海外滞在年数の多寡に関わらず「統語的複合動詞」は誤りが少ないのに対し、「語彙的複合動詞」は海外滞在年数が長いほど誤用が増えたと報告している。

寺田(2001)は複合動詞の言語学における成果を踏まえ、また習得理論を踏まえた研究として、第二言語としての複合動詞習得に大きな示唆を与えることができる。本稿は、寺田(2001)からヒントを得て、第二言語としての二種類の複合動詞の習得研究を行うことにした。

³ mental lexicon というのは、語彙が習得されているというとき、頭の中に語彙の何かがあるように内在化されているかという、ひとりひとりが持っている脳内辞書とでもいうべきものである。

4. 調査

4.1 使用コーパスの概観

本稿では、話し言葉・書き言葉の両面から学習者による二種類の複合動詞の習得を捉えるために、学習者が産出した発話データと作文データを用いた。

4.1.1 発話データ

発話データとしては、OPI(Oral Proficiency Interview)テストの形式に沿って行われた「KY コーパス」を使用した。KY コーパスには中、英、韓三国語を母語とする学習者 30 人ずつ(それぞれ初級 5 人、中級 10 人、上級 10 人、超級 5 人ずつとなっている)のデータがバランスよく収集されている。総文字数は 390,907 である。OPI という客観的かつ汎言語的基準によりレベル判定が行われており、データ構成の整合性が良く、レベル別、母語別の比較など多角的な分析が行える。

4.1.2 作文データ

作文データとしては、国立国語研究所により作成された「日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース ver.2」(作文対訳 DB)の CD-ROM 版に収録された作文データを使用した。このコーパスには、1999 年から 2000 年にかけて中国、韓国、インドなどアジア 10 カ国から約 1,100 名分の日本語学習者の作文データが収録されており(1057 編)、総文字数は 693,224 である。また、比較のために日本語母語話者による作文も収録されている(66 編)。作文の課題は「あなたの国の行事について」と「たばこについてのあなたの意見」の 2 種類である。⁴

4.2 調査方法

調査には、複合動詞例文の抽出と例文の正誤判断の二段階に分けて行った。

まず、「茶釜」でそれぞれ KY コーパスと作文対訳 DB に対し品詞情報を付与した。タグ付けされたデータについて、レベル別或いは学習年数別ごとに複合動詞を抽出し、元のデ

⁴ ただし、カンボジアには、喫煙者が極めて少ないという事情から、「外国からの援助について」(援助)という課題を用意している。

一タと照らし合わせ、複合動詞例文集を作成した(KY コーパス 194 文、作文対訳 DB685 文、合計 879 文)。2.3 で示した分類基準ですべての複合動詞例文に対し、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の二分類を行った。

次に、すべての複合動詞例文について、日本語母語話者 15 名(そのうち、日本語教育者 8 名)に、正用・不自然・誤用の三段階で判定してもらった。また、誤用や不自然であると判断した場合には、判定理由と訂正案についてのコメントを記してもらった。その結果を基に、レベル別・学習年数別の使用数、正用・誤用率の集計を行った。また、誤用・不自然と判断された文については、母語話者によるコメントを読み取って、誤用分析をした。

5. 調査結果と考察

5.1 全体的な使用傾向

学習者による二種類の複合動詞の全体的な使用傾向を見るために、KY コーパスと作文対訳 DB に対し、それぞれレベル別・学習年数別に語彙的・統語的複合動詞の使用数や正用・誤用率の分析を行った。

まずは、全体像を捉えるために、KY コーパスと作文対訳 DB を総合した語彙的・統語的複合動詞の正用・誤用率を図1で示した。語彙的複合動詞は正用率が統語的複合動詞よりも下回り、誤用率が 30%程度になっている。一方で統語的複合動詞は正用率が 55%程度、不自然、誤用とも 22%程度で語彙的複合動詞よりも若干、習得しやすいようである。

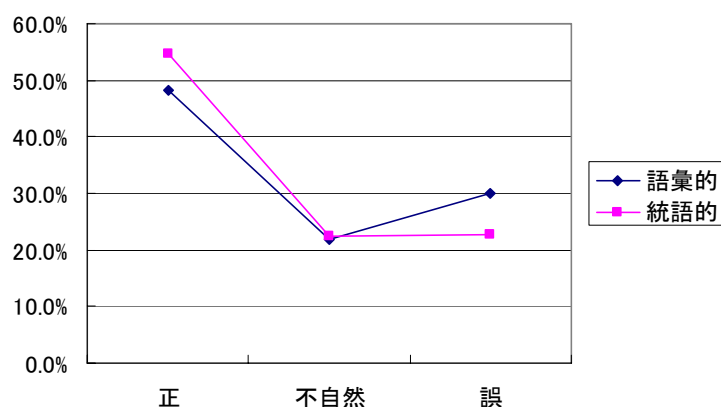


図1. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞の正用率 (KY コーパスと作文対訳 DB)

図2では作文対訳 DB での比較になるが、複合動詞の使用数(一人当たりに換算)で語

彙的複合動詞と統語的複合動詞を比較したところ、ともに母語話者よりも使用数が低い、特に語彙的複合動詞の使用が少ない。図1と図2に示したことを総合すると、学習者による語彙的複合動詞の使用は統語的複合動詞より少ないうえに、誤用も多く見られることから、統語的複合動詞と比べ、語彙的複合動詞の習得は比較的困難なようである。

その原因としては、語彙的複合動詞は、「さまざまな程度に意味が慣習化され(影山・由本 1997:68)」ているため、統語的複合動詞に比べて、意味的な透明性が低い。そのため語彙的複合動詞は、前項動詞と後項動詞の意味が分かっても、正確な意味を推測できるとは限らない(谷内・小森 2009)。「前項動詞と後項動詞の意味を足す」ストラテジー(松田 2000)が、語彙的複合動詞の場合には機能しないことがある。むしろ、このストラテジーを過剰使用することで、語彙的複合動詞の場合には誤用が多く見られると思われる。

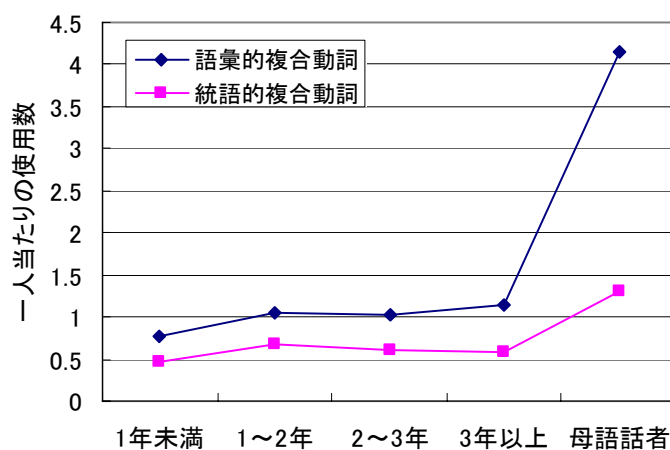


図2. 一人当たりの語彙的複合動詞と統語的複合動詞の使用数(作文対訳DB)

ただし、話し言葉の場合、辞書を引いたり、考えたりする時間があまり許されないので、知っている表現だけを使ってしまうと推測される。一方、書き言葉の場合、自分の知らない表現を対訳辞書で調べ、そのまま使用する可能性が大きいと考えられる。ゆえに、次に、より深く学習者による語彙的・統語的複合動詞の使用状況を見るために、それぞれ話し言葉と書き言葉におけるレベル別・学習年数別の正用率を見してみる。

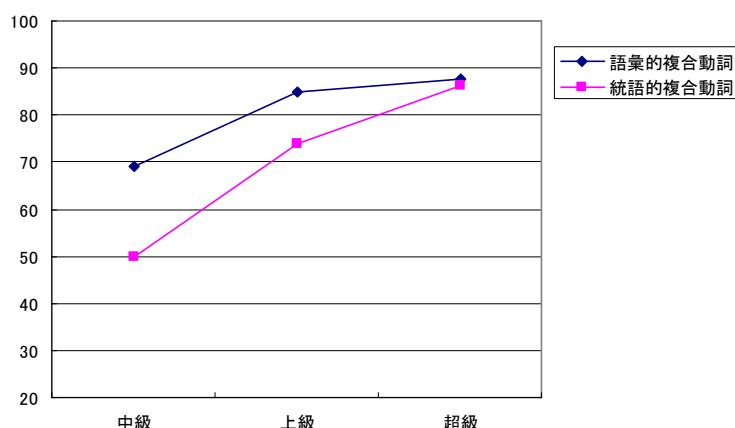


図3. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞のレベル別正用率(KYコーパス)

図3では、話し言葉における学習者のレベル別の正用率を示した。話し言葉においては、学習者のレベル上昇につれて、語彙的複合動詞でも統語的複合動詞でも、正用率が上がっている。しかし、各レベルにおいて、語彙的複合動詞の正用率は統語的複合動詞の正用率より高い。超級になって、両方とも85%以上の正用率になるが、中級、上級において、統語的複合動詞の正用率は語彙的複合動詞より、10%~20%低い。同じデータベースより抽出した二種類の複合動詞にこのような差があるため、中級、上級の学習者にとって、語彙的複合動詞より統語的複合動詞の習得が困難であることが言えよう。

この結果を寺田(2001)と比べて検討する。寺田(2001)は、帰国子女による統語的複合動詞は誤りが少ないのに対し、語彙的複合動詞は海外滞在年数が長いほど誤用が増えたと報告している。しかし、今回の話し言葉の調査結果では、どのレベルにおいても、語彙的複合動詞より統語的複合動詞の誤用率が高く、寺田(2001)の研究とは逆の結果になっている。その原因は二つが挙げられる。一つ目は、調査対象が異なることである。日本語の情報を制限されて海外で幼少期を過ごした帰国子女は、日本語の習得環境としては、学習者と似ている点もあるが、第二言語として日本語を学ぶ学習者とはやはり違うプロセスを辿るのではないかと思われる。もう一つは、調査方法が違うことである。寺田は、誘導型データを用いたが、本研究は学習者の発話産出データから複合動詞の自発的使用を調査した。このようなデータの調査方法の違いによる影響を取り除ける方法を探るのも今後の課題の一つである。

いずれにせよ、少なくとも今回の調査からは、話し言葉において、学習者による誤用は統語的複合動詞のほうが多かった。その原因は、語彙的複合動詞は一旦覚えれば、その

まま使うことができるに対し、統語的複合動詞は文法的な性質があり、前項動詞と後項動詞の結合ルールを過剰に一般化してしまい、それが誤用として現れたのではないかと推測される。(学習者の誤用例は 5.2.1 を参照)

一方、書き言葉は図4にあるように、様相が異なる。語彙的複合動詞に関しては、学習年数1年未満では55%程度であった正用率が学習年数の経過とともに徐々に増加し、3年以上の学習者は65%まで緩やかに増加する。統語的複合動詞は学習年数が低い時期では語彙的複合動詞よりも正用率が高く、70%程度であったが、学習年数とともに正用が増えるわけではなく学習年数2～3年以上になると正用率が語彙的複合動詞と同程度となる。書き言葉において、統語的複合動詞は産出しやすいことにより、ある程度まで発達すると、今度は過剰な使用傾向となり、やがて習得が深まるにつれて母語話者と同じような使い方になると思われる。

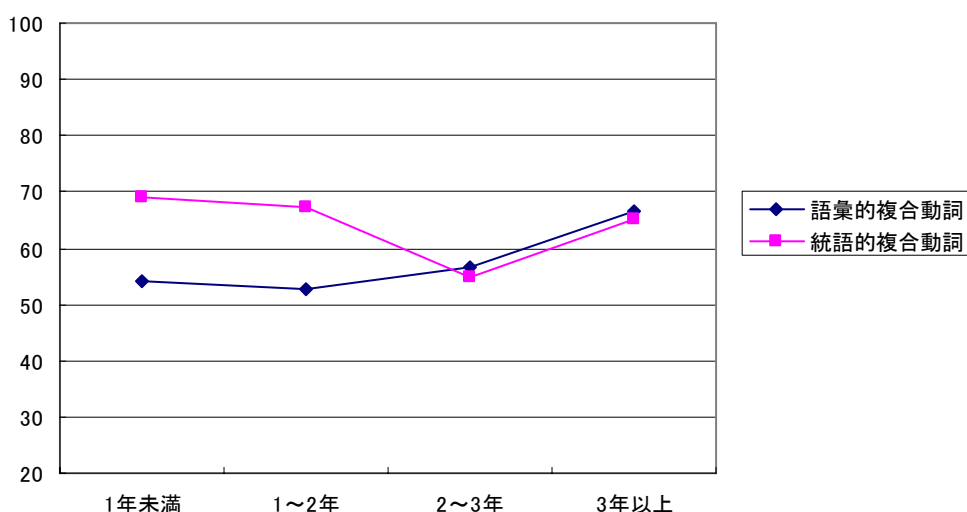


図4. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞のレベル別正用率(作文対訳 DB)

5.2 二種類の複合動詞の誤用分析

5.2.1 統語的複合動詞の誤用

統語的複合動詞は、意味的透明性が高く、それぞれの動詞の意味が分かれば、全体としての意味を導き出すことができるため、日本語学習者にとっては、その理解と使用が比較的容易であると言われる(谷内・小森2009)。また、文法項目として指導を受ける機会があるため、誤用が少ないのではないかと考えられるが、今回の調査では、このような予想と違

う結果が現れた。

統語的複合動詞の中で、特にアスペクトを表す複合動詞は文法さえきちんと理解できれば比較的習得が容易と考えられるが、(1)(2)の「吸い始まる」「笑いはじまる」や、(3)の「とび続いていた」などに見られるように、後項動詞の自他動詞の誤用が目立った。後項動詞の自他についての誤用は母語話者には非常に違和感があるようであり、「不自然」という割合が少なく、ほとんどの母語話者に誤用と判断されているという特徴がある。

学習者が自他動詞の区別がまだ出来ていない段階で複合動詞を使おうとすると、当然ながら複合動詞になるときに自他が間違った状態で結合してしまう。さらに、従来の研究では、「打ちあがる」のような「他動詞+自動詞」型の複合動詞、また「落ち着ける」のような「自動詞+他動詞」型の複合動詞は、複合動詞の組み合わせの原則から外れた動詞とされ、この類の不規則な複合動詞は対応する複合動詞から派生したと指摘されている(影山1993)。

複合動詞として使用する場合、「～することを(行為者が)始める」のであるから「～始まる」は誤用であるということを学習者に徹底することが必要である。アスペクトを表す複合動詞は「～はじめる」、「～かける」、「～だす」、「～つづける」のように多くは他動詞であり、主語一致の原則から自動詞は用いない。(例外として「～おわる」は「～おえる」と互換性のある場合があるが、これは「～おわる」は本来自動詞であるが、「試験が終わる」など他動詞的な用法があることに起因すると思われる)適切に初期指導すればさほど問題にならないと思われる。

(1) 子供たちもせんでんや年上の吸っているの人々を見てたばこを吸い始まります。

(作文対訳 DB、インド人学習者、学習年数1～2年)⁵

(2) 一人の女の人はいくすりなどを持って来たときゴールはふたたび笑いはじまりました。

(作文対訳 DB、インド人学習者、学習年数1～2年)

(3) からすは下に木が見えなくなるまでとびつづいていました。ずっと一時間ぐらいたんできていた。

(作文対訳 DB、インド人学習者、学習年数1年未満)

⁵ ()は例文の出典、学習者の母語や国、レベルや学習年数などの情報を示す。ただし、例文は一部変更あり。以下同じ。

統語的複合動詞であるため、高い造語力があるが、学習者は語のイメージを持っていないため、適切な場面での使用ができないことが誤用の中で多かった。(4)では、「渡しあう」でも十分に意味は通るが、母語話者 16 名中9名が「交換する」、もしくは「交換し合う」を用いた方が自然であると判断している。「指輪」と共起するお互いに渡す動詞として「交換する」の方が慣習的によく用いるということであろう。(5)は「話し合う」の誤用例である。「話し合う」は何か問題・課題を解決するために複数人がある議題についての意見を取り交わすことであり、おしゃべりをするだけなら、本動詞「話す」のみで使用する、あるいは「語り合う」などを用いるのが自然であるが、学習者は過剰般化して用いる傾向がある。

(4) はなよめとはなむこは先祖仏壇の前になつて結婚の指輪を渡し合います。

(作文対訳 DB、ベトナム人学習者、学習年数1年未満)

(5) タバコを吸っている人と話し合っている人は、自分は吸っていないにもかかわらず、吸っている人の喫煙量の3分の1ぐらいの量を吸い込むことになるそうだ。

(作文対訳 DB、韓国人学習者、学習年数2～3年)

以上で分かるように、意味の透明性が高く、習得が容易に思われる統語的複合動詞に関して、後項動詞の自他動詞の誤用、不適切な場面での使用などが多く見られた。統語的複合動詞を文法項目として指導する際に、自他動詞との関わり、適切な使用場面の説明、類義語との使い分けなどについて留意すべきである。

5.2.2 語彙的複合動詞の誤用

語彙的複合動詞の場合、V1とV2の結合に2.2で述べたようにいくつかの結合制限があるため、「動詞+動詞」が全て複合動詞として受容できるわけではない。しかし、その結合条件が学習者に示されていないもしくは習得されていない場合、学習者は過剰般化して不適切な複合動詞を作ってしまう可能性がある。今回の調査では書き言葉で特に顕著であったが、「AしたりBしたりする」「AしてBする」「AすることをBする」という言い方が自然であるにもかかわらず、複合動詞として「AB する」としているものが主であった。(6)の「もらいあげる」、(7)の「持ち離れる」など、「動詞連用形+動詞」を誤って複合動詞にしている誤用が多かった。したがって、複合動詞を指導する際、前項動詞と後項動詞がどのような条件下なら接続し得るかということを説明すべきである。

(6) みんなはうれしくて、プレゼントをもらいあげます。

(作文対訳 DB、シンガポール人学習者、学習年数1～2年)

(7) 春節の日掃除することは禁止です。掃除すると、運も持ち離れると言われていま
す。

(作文対訳 DB、中国人学習者、学習年数1～2年)

語彙的複合動詞の誤用には、本動詞のみの使用が正しい箇所に、誤って複合動詞を使用してしまう例が多く見られた。複合動詞は本動詞単独で用いられる場合と違って、方向性や結果などの意味が追加されることで、元の動詞とは異なるニュアンスを持つことになる。しかし学習者が、その働きがあることを十分に理解せずに、複合動詞を「強調」として捉えている場合、過剰に使用して違和感がある文となり、本動詞のみで用いた方が自然に感じるケースもある。特に、明確な意味づけをするアスペクトを表すものや、方向を表すものではなく、細かなニュアンスを与えるような複合動詞は特に、本動詞との差に注意しながら習得することが必要となる。今回の調査での母語話者の回答に「複合動詞にすると違和感がある」とのコメントが多数あったので、教育現場としては、複合動詞には結合できるものとそうでないものがあることを明示し、本動詞との意味的な差を習得させることなど、よりきめの細かい指導が求められる。

(8)は正用とするには「たばこをやめたがっていない」とすればよい。「歩き始める」という複合動詞は「歩くことを始める」と言い換えられる。しかし、「吸うことをやめる」は「吸いやめる」という複合動詞にはならない。複合語となる結合力を持っているものとそうでないものの分類と論理的な説明を付けるような研究が進んでいかないと、このような過剰般化による誤用は後を絶たない。

(8)しかし、心が強くなって回りの人がたばこをすっているから、たばこをやめません。
ところが、たばこをすいやめたがっていない人がたくさんいます。

(作文対訳 DB、インド人学習者、学習年数1～2年)

(9)に使われる「執り行う」に対し、母語話者は「執り行うは少しおおげさな感じがする。お正月を祝う、で十分だと思う」とコメントしており、「執り行う」はもっと公的な行事などに用い、

家庭内の正月にはふさわしくないようである。(10)の「取り組む」は活動や運動をすることであり、文化を自国に吸収する場合には、「取り組む」より「取り入れる」「取り込む」が適切である。

(9)、(10)は、意味が通じなくなることはないが、微妙にニュアンスが異なり、不自然に感じられる例である。このような複合動詞の誤用は、指導する際に最も難しい部類であると思われる。しかし、日本語を母語話者と同じように扱えるためには、このような微妙なニュアンスを会得する必要があり、豊富な例文の提示が必要である。

(9)家庭のそれなりの習慣によって旧曆に執り行う場合もあり、陽曆に執り行う場合もあります。

(作文対訳 DB、韓国人学習者、学習年数1～2年)

(10)それですごいヨーロッパからの文化をとりくんで、西海岸の場合は、アメリカ、そのままっていうような印象があるんですね。

(KY コーパス、英語母語話者、超級)

語彙的複合動詞の誤用傾向を考察したが、「動詞連用形+動詞」を誤って複合動詞にしている誤用、本動詞のみの使用で十分な場面での複合動詞の使用、微妙にニュアンスの異なる複合動詞の使用などが目立った。これから言えることは、語彙的複合動詞の結合条件、本動詞との意味的差異、また、具体的な用例を提示しながら本動詞のみでの意味と異なる部分を学習者に意識させることが重要であるということである。

6. まとめと今後の課題

本稿では、運用データを用いて、第二言語として日本語を学ぶ学習者の話し言葉と書き言葉における二種類の複合動詞の全体的な使用傾向及び誤用を扱った。

話し言葉と書き言葉を合わせた全体的な使用傾向の分析結果、学習者による語彙的複合動詞の使用は統語的複合動詞より少ないうえに、誤用も多く見られることから、統語的複合動詞と比べ、語彙的複合動詞の習得は比較的に困難であることが分かった。複合動詞はどちらかという文法項目より、語彙の学習として位置づけられるべきである。それゆえに、今後、語彙的複合動詞を視野に入れ、学習者のレベルによってどこまで指導してよいか、

どのように指導してよいかということを研究する必要があると思われる。

誤用の分析結果、統語的複合動詞の場合には、後項動詞の自他動詞の誤用、不適切な場面での複合動詞の使用などの誤用が多く見られた。語彙的複合動詞の場合には、本来、複合動詞にはならない動詞の結合、本動詞の使用が望ましい場面での複合動詞化、使用場面の誤解などが見受けられた。この結果から、複合動詞を指導する際、ベースとなる動詞(自動詞と他動詞を含む)の指導をきちんと行う、複合動詞の結合法則について明示する、本動詞と関連付けて説明する(意味の違いを明示)、具体的な例文を用いて習得の支援を行うなどが必要であると思われる。そして、今までの教科書・辞書中心の指導からデータベースやインターネットを活用して生きた複合動詞のインプットの絶対量を増やし、産出面にまで踏み込んだ指導が必要であると考えらる。

本研究では学習者の運用データをもとに二種類の複合動詞習得にかかわる問題の核心に迫ろうとしたが、今後これを実証するため、二種類の複合動詞に関する学習者の理解の構造の裏付けや教室内の指導方法の検討と実証をしていきたい。

[参考文献]

- 于康(2009)「日语复合动词的研究和日语复合动词的教学」『北研学刊 特集号・日本語の複合動詞』5 pp.1-10
- 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
- 影山太郎(1996)『動詞意味論—言語と認知の接点』くろしお出版
- 影山太郎・由本陽子(1997)『語形成と概念構造』日英比較選書8 研究社出版
- 何志明(2007)「香港における上級日本語学習者の複合動詞の習得及び使用実態調査」『日本語教育学会 2007 年度春季大会予稿集』 pp.47-52
- 何志明(2009)「香港の日本語学習者の複合動詞習得の現状」『北研学刊 特集号・日本語の複合動詞』5 pp.105-115
- 何志明(2010)『現代日本語における複合動詞の組み合わせ—日本語教育の観点から』笠間書院
- 社団法人 日本語教育学会(2005)『新版日本語教育事典』大修館書店
- 田中衛子(1996)「複合動詞—日本語学習者の教育項目として」『日本語・日本文化論集』4 pp.83-99

- 谷内美智子・小森和子(2009)「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果—語彙的複合動詞を対象に—」『日本語教育』142 pp.113-122
- 張威(2009)「小学校国語教科書に対する複合動詞の実態調査とその分析—第二言語習得ストラテジーの改善をめざして—」『北研学刊 特集号・日本語の複合動詞』5 pp.27-46
- 陳曦(2004)「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—「～あう」と「～こむ」の理解に基づいて—」『ことばの科学』17 pp.59-79
- 陳曦(2006)「中国人学習者における複合動詞の習得に関する一考察—学習者の作文産出に基づいて—」『ククロス:国際コミュニケーション論集』3 pp.1-15
- 陳曦(2007a)「日本語複合動詞の習得状況と指導への問題提起」『国際開発研究フォーラム』35 pp.93-102
- 陳曦(2007b)「学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—コーパスによるアプローチ」『日本語科学』22 pp.79-99
- 陳曦(2008a)「日本語学習者と母語話者における日本語複合動詞使用状況の比較—作文データベースを用いて—」『小出記念日本語教育研究会論文集』16 pp.83-96
- 陳曦(2008b)《关于日语复合动词习得的研究》中国社会科学出版社
- 寺田裕子(2001)「日本語の二類の複合動詞の習得」『日本語教育』109 pp.20-29
- 永井鉄郎(1996)「日本語複合動詞の教育について」『日本語教育』88 pp.56-61
- 白以然(2005)「複合動詞「～出す」・「～始める」の習得—韓国語を母語とする学習者の意識を中心に—」『人間文化論叢』18 pp.307-315
- 白以然(2007)「韓国語母語話者の複合動詞「～出す」の習得—日本語母語話者と意味領域の比較を中心に—」『世界の日本語教育 日本語教育論集』17 pp.79-91
- 姫野昌子(1975)「複合動詞・「～つく」と「つける」」『日本語学校論集』2 pp.52-71
- 松田文子(2000)「複合動詞の意味理解方略の語教育実態と習得困難点」『言語文化と日本語教育』20 pp.52-65
- 松田文子(2002)「日本語学習者による複合動詞「～こむ」の習得」『日本語教育論集 世界の日本語教育』12 pp.43-59
- 松田文子(2004)『日本語複合動詞の習得研究—認知意味論による意味分析を通じて』ひつじ書房
- 松本曜(1998)「日本語の語彙的複合動詞における動詞の組み合わせ」『言語研究』114

pp.37-83

森田良行(1990)『日本語学と日本語教育』凡人社

Larsen-Freeman, D. & Long, M.(1991) *An Introduction to Second Language Acquisition Research*.Longman.

Pinker, S.& Prince, A. (1991) Regular and irregular morphology and the psychological status of rules of grammar.*Proceedings of the Berkeley Linguistics Society*,17, 2230-2251.

[付記]

本稿は西安外国語大学 2009 年度科研基金(課題番号 09XWA02)による研究成果の一部である。

陳曦